

豚公爵に転生したから、今度は君に好きと言いたい

合田拍子



ファンタジア文庫

2540

豚公爵は賢く、強く、優しく、
そして悲しいことに根性がありました。
このシューヤ・マリオネットは
裏から見れば
彼の悲哀のお話です。

——『シューヤ・マリオネット』・監督



PIGGY DUKE WANT TO SAY LOVE TO YOU

This is because
I have transmigrated to piggy duke!

口
絵
・
本
文
イ
ラ
ス
ト
nauribon

序章 真つ白宣言！

目が覚め、俺は前世の自分を取り戻した。
慌ててベッドから飛び下り、寢室の隅に置かれた姿見の前に向かう。

暗闇に彩られた鏡面に、次第に浮かび上がるシルエツト。

「これはひどい」

そこには、想像を超えたデブがいた。

黒金の乱れた髪を持つ裕福そうなデブ、いや、これはもうデブじゃない。

豚だ、気持ち悪い豚が鏡の中から俺を見返していた。

寝起き特有の覚醒しきれぬ意識のまま、俺はこちらを見つめる二本足の豚と見つめあう。
寝汗で額に張り付いた髪の毛が何とも気持ち悪く、相手を舐めているかのような不敵な

面構え。こいつ絶対友達とかいないんだろ？うな、だって金や権力を使って今にも女の子に抱き付いてぶひぶひ言いそうな雰囲気醸し出してるもん。

……だがしかし、俺はこの顔に見覚えがあった。

「嘘だろ……俺って『シューヤ・マリオネット』の世界に転生してたのかよ……」

これはあの大人気アニメに出てくる嫌われ者の顔だからだ。

剣と魔法、オークやドラゴンをはじめとする多種多様なモンスター、さらに魔法学園での楽しい生活やかわいい女の子達との触れ合いを描いたファンタジーアニメ。

放送開始直後からいきなり話題をさらった覇権アニメ、『シューヤ・マリオネット』。

火の魔法の才能に恵まれた貴族の少年が魔法学園に入学し、その変人っぷりで周りから見下されながらも学園の女子生徒達と仲良くなり、彼女達が持つ悩みや敵国との間で起こる戦争を解決していく熱血ファンタジーアニメである。

何故、俺がそんなアニメの内容を思い出しているのかというと、前世の俺が熱狂的な『シューヤ・マリオネット』の支持者だったからだ。

だけど、何故だ？

どうしてだよ、信じたくないよ、こんな現実、認めたくないよ。

だって……だってさ。

「何で俺が豚公爵スロウ・デニングなんだよ、もつと良いキャラクター一杯いただろ……主人公のアイツとかさ……」

大国ダリスを支える大貴族。

風のデニング公爵家三男、豚公爵ことスロウ・デニング。

人を見下す、家柄を鼻にかける、デブ、リアルオークなど様々なヘイト要素を持ち、最終的には実家であるデニング公爵家からも追放される男の子。

さらにはこの男、密かに思いを寄せていた女の子もアニメ版主人公のハーレムの一員になるという不遇っぷり。親であるデニング公爵からお前はダンジョンから拾ってきた子供なんだと告げられる哀れな豚。

「あーあ。俺の恋って叶わないで終わるんだなあ」

だといふのに、嫌われ豚公爵である俺は相変わらずのんきな顔で突っ立っている。

俺は血色の良い、にへーっと緩んだ頬をぺちぺち叩く。十六年親しんできた顔がこうも醜く映る日が来るなんて想像もしていなかったよ。

「改めてよく見るとひっでー外見してるなあ」

鏡の中には苦しそうに顔を歪める豚がいた。

「……………あれ、でも今の俺ってあれだよな」

頭の中にある今までの記憶や経験が、現在の状況を的確に教えてくれる。

「簡単に考えれば俺、未来を知っちゃったってことじゃね？」

誰に言うでもなく、一人ごちる。

そう、これからこの世界で起こる未来が、アニメ知識や掲示板で考察された全ての知識が今の俺の頭に詰まっている。アニメ版主人公であるあいつが世界を救うまでの過程を全て俺は知ってしまった。

つまり俺の前には無限の可能性が広がっているという何とも素晴らしい状況なんだけど。

「はあ」

視界にぶよぶよの腹肉が見え、思わずつまんだ。

「……この体形酷すぎるってもんじゃないだろ。意地悪な神様だよなあ、出発地点は超ハードモード。どうせならもつと良いキャラクターに転生させてくれたらいいのに。アニメで主人公張ってるあいつとかさ……」

考えるまでもなく、この体形は酷すぎる。

俺がこれから何をするにおいてもダイエットをして痩せることをまず第一に考えなくてはいけないだろう。幾ら可愛らしい子豚ちゃんが刺繍されたバジヤマを着ているといつて

も、このだるだるになった醜い体形を隠しおせるものではないのだ。

学園史上最大の問題児とか言われている俺、こんな嫌われ者のまじや日常生活すら送れないよ。

今までの俺は理由があったとはいえ、我儘な真っ黒豚公爵を演じていた。

演じなければならぬ理由があった。

けれど、このアニメ知識があれば俺は何にだってなれる。

今までの俺は腹黒で真っ黒でクルシシ魔法学園でも最悪の問題児だった。

でもこれからは、大切な彼女を守りながらも風の神童として輝いていたあの頃の自分に戻れるかもしれないのだ。

輝かしい未来を想像し一人で悦に入っていると突然、部屋の扉がノックされる。

こんな朝早くに一体誰だ？

俺は寝室を出てリビングに移動した。

「……ぶひ」

またコンコンと扉をノックする音が聞こえる。

「スロウ様、起きていますか？ 朝食をお持ちしました」
ほらな。

透き通るような爽やかさ、聞き慣れた声が俺の耳に届く。

「起きてるよ。入ってきてくれ、シャーロット」

「はい」

間延びした声と共に俺の従者——シャーロットが部屋に入ってきた時、俺の心臓がどくと大きく脈打った。

その可憐な容姿に息を呑んだからだ。

「お、おはよ、しゃ、シャーロット」

思わず言葉がつつかえてしまった。おい、キモオタみたいとか言うなよ。だって本当に可愛いんだぞしょうがないだろ！『シューヤ・マリオネット』に出てくる女の子は皆可愛いんだ！

「おはようございます、スロウ様！」

肩先まで伸びたシルバーヘアは艶やかで、その姿はまさに雪の女神、いや雪の妖精だ。可愛らしいクルツシュ魔法学園の制服でもなく、ヒラヒラとしたメイド服でもなく、ちょっと地味めだけど真面目さを強調した従者服。

均整のとれた体つきと凛とした姿勢の良さ。えっしょえっしょと一生懸命に朝食の準備をしている姿はとても可愛らしいのだが、彼女から溢れ出る高貴さは従者という身分にそぐわない。

けれどそれも仕方のないことだろう。

シャーロットは秘密にしているが、実は彼女の正体は滅亡した他国の王女様。

つまり、プリンセスなのだ！

「スロウ様。今日は自分で起きられたんですね」

「ぶひ！」

そしてそんな彼女こそがアニメの中ではアニメ版主人公に奪われてしまう俺の思い人だつたりするのだ。俺は高そうなテーブルに備え付けられた椅子にでっぷりと座り、てきぱきと朝食の準備をするシャーロットを見つめた。

でも不思議だ。毎日見ていた光景なのに新鮮に感じるのはどうしてだろう？

「朝食の準備をしますので少し待っててくださいねー。今日はシチューみたいですよ」

「朝からシチューか、太りそうだな」

「何を言ってるんですかスロウ様。今更ですよ」

「……それもそうか」

スムーズな動きでテーブルの上に料理や水差しを置いていく従者の姿。
そんな彼女との出会いは十年近くも昔に遡る。

うちの実家、デニング公爵領地の大半を占める深い森の中で奴隷としてオークションに掛けられていたシャーロットを豚公爵が助けたのだ。小さい頃はシャーロットも豚公爵に對し恩義を感じていたが、アニメの主人公であるあいつとの交流やドストル帝国との戦争を境にどんどん思いは豚公爵から離れていく。

そしてクルッシュ魔法学園の第三学年、学生としての最後の冬に事態は動く。アニメ版主人公に危ない場面をギリギリで助けられ、シャーロットはハーレムの一員へと堕ちてしまったのである。

豚公爵もシャーロットが主人公に惹かれていくことに気づき色々と頑張ったのだが時既に遅し。やることなすこと全てが空回りに終わり、笑いのものになる始末だ。

こんな最悪な豚公爵であるが、大人気アニメ『シューヤ・マリオネット』の登場人物ラッキングでは圧倒的な人気で一位を独走していたりする。

可笑しいよね、だって俺ってこんなにデブで豚で、見るもの全てが思わず溜息を吐いてしまうような自堕落オークと言われるほどのダメ人間なのに。

さて、その理由は三つある。

一つ目は単純にアニメ版主人公の人气が無いから。

お前にハーレムは相応しくない！ といった妬みである。

大人気アニメ『シューヤ・マリオネット』に出てくる女の子達は皆可愛いのだ。嫉妬しちゃうのかもしれないよね。

「スロウ様。お食事の用意が出来ました。シチューは熱いかもしれないのでよくフーフーしてくださいね」

「ぶひい！」

俺の声だ！

豚である俺は、時々こんな可笑しな声が勝手に口から出てしまうのだ。

おっと、そんなことはどうでもいいな。

アニメの中で豚公爵が人気を博した理由、その二つ目は豚公爵の表に出ない頑張りっぷりから。

シャーロットの素性が最後まで世に出なかった理由。

それは全て、豚公爵の奮闘によるものだ。

豚公爵はアニメの中で敵国として描かれている帝国に狙われていたシャーロットを守るために、アニメの裏側で様々な刺客たちと日夜戦っていた。けれどその功績を誰にも告げ

ず、美味しいところはアニメ版主人公に持つていかれる可哀想なヤツなのだ。

そして作中では豚公爵はシャーロットへの恋心を最後まで明らかにせず、裏設定では豚公爵だけが彼女が滅亡した大国の王女であることを知っていたことが明かされた。

たった一人で戦っていた嫌われ者、そんな悲哀が視聴者に受けていたのだ。

まあこんなオークの中でも迫害を受けそうな外見の豚がシャーロットに好意を伝えても結果は火を見るより明らかであつただろうが。

そして、豚公爵が人気がある最後の理由。

それは。

「……シャーロット。いつもありがとうぶひよ」

「え」

シャーロットは俺の言葉に心底ビックリしたようだった。

ビックリしすぎて持っていた紅茶セットを落とし、ガシャンと金属特有の甲高い音が立てられる。

「ご、ごめんなさいスロウ様」

「いや、気にしないでくれ」

慌てて割れた破片を拾い集めようとするシャーロットが驚いて、俺を見た。

赤い絨毯の上で割れた破片がふわふわと浮き華麗な踊りを披露している。

裏設定で明らかになった事実だが――

「小さく静かな風の悪戯」

――豚公爵は歴史上、最も精霊に愛されたとされる魔法使いだったのだ。

季節は春、ピッカピカの新入生を迎えたばかりの爽やかな春うらら。

真つ黒豚公爵は、いや俺は十六歳。

クルッシュ魔法学園に入学して一年がたち、既に俺の悪評は学内に留まらず他国にまで

知れ渡っていた。

けれど、そんなことどうだっていい。

「シャーロット。今更だけど……おはよう」

俺の従者、シャーロット。

いや、滅ぼされし大国のお姫様プリンセスシャーロット・リリイ・ヒュージャック。

「お、おはようございます。スロウ様」

ぺこりと頭を下げる君を目にして。

アニメの中では成し遂げられなかったけど、俺は君に相應しい男になると心の中で固く誓った。

一章 クルツシユ魔法学園の問題児

大人気アニメ『シューヤ・マリオネット』放送前。

何も明かされていない空白の時期に俺はいた。

アニメの舞台であるクルツシユ魔法学園。歴史ある石造りの校舎や新緑に染まった木々の葉を視界に収め、早朝の爽やかな風を肌に感じながら俺が考えるのはたった一つ。

このデブ！ このデブ！ このデブッ！

俺は今までの自分、真っ黒豚公爵に対して呆れ、そして怒っていた。

こいつが何故デブになり、貴族としてあるまじき振る舞いを通じて周囲からのヘイトを貯めていたのか知ってしまった。

「ぶほ、ぶう、ぶっひっひ」

真っ黒豚公爵、全て計算ずくのつもりでした！

騎士国家とも評されるダリスの国軍を統括する権力を王室より与えられた大貴族。

デニング公爵家に生まれついた人間が平民の従者と結ばれるなんて許されない。故に皆から疎まれ、公爵家の品格を落とし、最終的には家から追放されるように仕向けた呆れるほど気の遠くなるような戦略だ。

家を追放された後はどこか遠くの地でシャーロットと慎ましく暮らす夢があったらしいが、そんな真っ黒豚公爵の夢は叶わない。

愛しの彼女がこの世界の主人公であるあいつに奪われてしまうことを俺は知っている。

「ぶっひっひ、ぶっひ、ぶっひひ、ぶふ、ぶっひっ」

滝のような汗を流しながら、人っ子一人見えない早朝の運動場でランニングに精を出す服は汗でベトベトで足は今にも纏れそう。あーもうメチャクチャしんどいよ。

おい真っ黒豚公爵、いや俺さ、どんだけ運動しなかったんだよ！ こんな醜い姿であるのシャーロットが振り向いてくれるわけないだろ！

「なあ見ろよ……朝っぱらから豚公爵が走ってるぞ……」

「あの豚公爵がこんな朝からランニング？ この一年間、あいつが走ってる姿なんか見たことないってのってうわほんとだ……オークが火炙りされてるみたいだなあの姿……」

「おい声がでかいって……あいつに聞こえたらどうするんだ……。腐ってもあのデニング公爵家の人間なんだぞ……」

朝ご飯を求め、寮から食堂へ向かう道中の生徒達から陰口や冷やかしの声が聞こえてくる。だけど俺は精一杯腕を振り、えっほえっほと走り続けた。

真っ黒豚公爵が周りからどれだけ押搦されても太り続けた理由、それは国中の人たちに自分は無能だとバカにされ続けたいといけないからだ。

騎士国家ダリスで異彩を放つ大貴族、風のデニング公爵家。

今のデニング公爵、つまり父上から俺は溺愛されていた。自分で言うのも何だが、俺の才能は飛び抜けている。どれぐらいのものかと言うと、公爵家の長い歴史を見ても俺に匹敵する才能の持ち主はいないそうで、物心付いたときから俺は次代公爵となるべく英才教育を受けていたぐらいなのだ。

「ねえ、もしかしてあの人が……？」

「噂には聞いてたけど……私、あんなに太ってる人初めて見たよ……」

「君たち新人生か……？ 彼がクルツシユ魔法学園史上最悪の問題児、スロウ・デニングだ。平和な学園生活を送りたいならあまり近寄らないほうがいいぞ……」

しかし六歳の時。

俺はデニング公爵領地の森の中で違法な奴隷市場を見つけ、悪戯な風の精霊から壇上に並べられている一人の女の子の悲しすぎる素性を知ってしまった。目の前に見える瘦せ細

った女の子がああ滅亡した大国の王女だと知ってしまった。彼女がどんな目に遭い、奴隷にまで身をやつしたかを知ってしまった。

そんなシャーロットを助け出し、俺の専属従者として抜擢してから数年後。

俺は自分の未来を大きく左右するであろう決断を下した。

真っ黒豚公爵となることを決めたのだ。

「ちよっと……あれって豚公爵じゃん……」

不摂生な生活、理不尽な物言い、聡明であった次代公爵は我儘なお坊ちゃんになり、それはもう見事に墮落した豚へと進化を果たす。いや、この場合は退化か。

そしてそんな豚公爵にとってはこの学園生活が最後の肝だった。

「ぶひっ、ぶひっ、ぶっひっひ」

アニメでは見事、豚公爵の策略は成功した。

父親であるデニング公爵から豚公爵は『スロウ。実はお前はダンジョンの中から拾ってきた子供なのだ』と橋の下で拾ってきた子扱いをされ、デニング公爵家からの追放が目論見通り決まったのだから。

「ぶひっ、ぶひっ、ぶひっひ」

——けれど、俺はそんな未来はごめんだ！

俺とはあるイベントでアニメの総監督が言っていた言葉を思い出す。

『豚公爵は賢く、強く、優しく、そして悲しいことに根性がありました。この『シェーヤ・マリオネット』は裏から見れば彼の悲哀のお話です。豚公爵は一人で全てを達成する力を持っていたために、シャーロットを主人公に取られたのです。豚公爵の何よりの誤算は北方と南方との間で戦争が起きてしまったこと。アニメ版主人公と縁が出来てしまったために戦争に巻き込まれたシャーロットの素性を隠し通すことは至難の業でした。けれど豚公爵はアニメの舞台裏で己の従者を守り続けた』

シャーロットへの思いを誰にも打ち明けず、万事をたった一人で言い、全てが終わった後に気持ち伝えようとしたバカが真つ黒豚公爵だ。

誰に頼ることもせず、ただ一人の少女を思い続けた豚が俺だ。

「ぶっひ、ぶっひ。ぶっひっひ」

けれど、俺はそんな未来を歩みたくない。

アニメのように、誰からも理解されず、孤独のまま打ち捨てられる人生は嫌だ。

だから痩せて、まともになろう。

さすがに今の俺を取り巻く状況は酷過ぎる。折角の学園生活をしているにもかかわらず友達ゼロ、話せる相手は従者一人とか、幾ら自業自得とはいえ涙が出てくる。

まず学園の皆との関係を改善させ、シャーロットと共に快適な学園生活を手に入れたい。偽りの真つ黒豚公爵ではなく本当の俺のまま、彼女と共に生きていくのだ。でもデニング公爵とかになるのは大変なので嫌だ。俺はシャーロットと二人、そこそこの生活が出来れば満足なのだ。

そんな頑張ってる俺なのに……マントを羽織った貴族の女の子達からの視線が突き刺さる。まだ走っていると、ダイエツトなんて今更無理とか！くそ、イライラする！

アニメの中で豚公爵はまず外見を徹底的に墮落させていた。

リアルオークとまで揶揄される外見は無能を表すシンボルとしてはピッタリだからだ。

「ぶっぶひあああ。ぶひああああああっ!!」

物思いにふけりながら走っていると運動場に埋まっていた石を踏んでしまい、バランスを崩した俺は勢いよく地面に転がってしまった。

痛い、顔に傷が付いたかもしれない。情けない姿だ、これが精霊に愛された俺の姿か。

「皆見ろよ。あれがデニングの豚踊りだぜ」

「声大きいって……聞こえちゃうよ……」

「聞こえるもんか、この距離だぞ」

俺は身体についた土を振り払いながら立ち上がり、さっきから喧しい奴らを睨んだ。

ふざけんな、全部聞こえてるっての。でも俺が聞こえない振りをしてるのはしよーもない陰口に反応するよりもっと大事なことがあるからだよ！

さて、……今日はこんなもんにしておくか。

全身に付いた泥を払い、腰に差したデニングの家紋入りの黒杖を軽く振るう。

爽やかな風が肉体を包み込み、身体から汚れが綺麗さっぱり取り除かれる。

「豚公爵って相変わらず魔法の腕だけはすごいよね……でもこの方向ってもしかして……」

「……これは珍しい。特別扱いのスロウ・デニングが自分の足で食堂に行くとはい」

運動場の向こう側に向かう俺を珍しそうに見ている奴らが多数いる。

だけど俺はそんな視線を気にすることもなく、どっしんどっしんと大きな音を立てながら食堂に向かって歩いていったのである。

どつかーんと食堂の扉を開くと、大勢の生徒たちが何列にも及ぶ長机の席に座って朝ごはんを食べていた。

カッチャカッチャと食器が触れ合う音が響き渡り、所狭しと並べられた長机の間ではフリフリのエプロンドレスを着たメイド達が両手で朝ごはんの載ったお盆を持ち慌しく動き

回っている。

さて、俺はどこに座ろうか。身体が大きいから誰かの間に挟まれるのは嫌だな……。よし、入り口近くの隅っこに座ろう。

「どっこいしょつ〜と」

やばい、椅子からはみ出してしまいそうだ。

俺、太り過ぎだろ。ぶぶぶ、余りにもでっぷりとした光景に思わず笑いそうになった。

やっぱり俺は豚公爵！ ダイエットしなきゃな！ というかさ、この椅子いきなり壊れたりしないよね？ 大丈夫？

「お、おおはようございます!! こ、ここ。こちらに置いてもよろしいですかっ!」

席に着くとすぐに可愛らしいメイドが俺に朝ごはんを運んでくる。

おずおずと緊張した面持ちで、冷や汗を垂らし手元は震えている。いつもは自室に食事を運ばせている俺が食堂に来たことが信じられないのだから。

「ここに置いてくれ、そう、そこでもいい。ありがとう」

「え……？ あ、あ、……は、はいいいい!」

顔を赤くしてそそくさと立ち去るメイドに次々と他のメイドが駆け寄ってきて何かを話しかけている。

きつと大丈夫だった？ とか意地悪されなかった？ とか言ってるんだろ？

「……はあ」

改めて気付かされる驚愕の事実。

俺って……メイドさん達からも怖がられてるんだな……。

「うまうま、うまうま」

猛烈な勢いで朝ごはんを口に運んでいく。

こうして皆と一緒に食べるのも悪くないもんだ。大勢の話し声を聞くと自分も誰かと喋っているような気分になれるからな。勿論、俺に友達はいないけど。

「もぐもぐもぐもぐ、あれ？ 食べ物全部無くなった。え？ 嘘でしょ？」

あつという間に食器が空になる。

え？ ちょっと待ってよ。量が少なくて嫌がらせ？ それに味付けも薄いしさ。皆はこの味や量で満足してるの？

俺は辺りを見渡して皆の反応を眺める。……な、なに？ 俺と目が合うと気まずそうに下を向いたり、友達と喋っていた子らもそそくさと立ち上がり食器を片付けに行ってしまった。

え？ どゆこと？ かなり傷つく反応なんだけどそれ。虐めか？ 虐めなのか？

「スロウ様。宜しければこちらをお召し上がり下さい」

ずいとな俺の目の前に朝食が載ったお盆が置かれる。おつ、何だ何だ。

顔を上げるとそこには綺麗な金髪の男がいた。

サファイアのような薄い青色の瞳、男の癖にどこか少女のような微笑み。つまり、俺の大嫌いな美少年がそこにいた。

えーと、いつ誰だったかな。

確か俺と同学年で……ああ、そうだ。思い出した。グレイトリード伯爵家の長男だったな確か！ アニメにも出てこなかったモブキャラだ。

「僕はビジョン・グレイトリードといいます。ダリス北東部一帯を治めているグレイトリード伯爵家の嫡子です。デニング公爵領地程の大きさはありますが、名誉においてはこの学園でもかなりのものだと思自負しております。お見知りおきを、スロウ様」

朝から爽やかに挨拶をされると悪い気はしないもんだ。

しかしどこからか誰かの舌打ちが聞こえ、お喋り声が消えてゆく。囁き声と突き刺さる視線、食堂にいる皆が俺とこの金髪に注目しているようだった。

でも皆のそんな反応も理解出来る。こんな人目がある食堂で堂々と俺に話しかけてくる

奴なんて今までに一人もいなかったからだ。

でも、こいつ。何でいきなり俺に話しかけてきたんだろう……何が狙いだ？

「つまり、えーと……。お前は俺に朝ご飯を献上してくれるってことか？」

「はい、スロウ様は食堂に来る前にランニングをしてもらいましたね、ですから一人分の食事では足りないと思ひまして。是非、僕の分までご賞味下さい」

「ほー、良い心遣いだな、さすがに伯爵家ともなれば礼儀も分かってるってことか、ええと……お前、名前何ていったっけ」

「ビジョン・グレイトロードと申します」

「お前の心遣い、しっかりと俺の心に届いたぞ」

「で、では！ 受け取って頂けるんですね！ スロウ様！」

「……」

当たり前の話だが、俺のお腹は一人分の朝食では一杯にならない。

……だからすげー誘惑！ 想像以上のパンチ力で俺の食欲を刺激する魔法のようなその言葉！ でもダメだダメだ！ ダイエットするって誓いはどこにいったんだよ！

俺は顔を上げ、公爵家の者らしく威厳をもってインチキ美少年を拒絶した。

「悪いがビジョン。俺はな、自分の分だけで充分なんだ。それにお前の分をもらったらお



前の朝ご飯が無くなるだろ？ だからこれは受け取れ……………う、はうッ！」
突如お尻に違和感、いや虚無感。

「うわあああああ！！！！ わあああああああああ！！！！」
俺の体重を支えきれなかったのだろう、椅子の脚がばきりと音を立てて折れ、俺の身体が冷たい床に投げ出される。

大広間の食堂は即座に沈黙、だがしかし大爆笑に包まれるのもまた早かった。

「ははっ！ 今の見たかよ！ あれがデニング！ デニング公爵家の豚公爵！ 早起きして食堂来て良かったぜ」

「おい笑うなって！ ふひ！ あいつに目をつつけられたら大変だぞ…………ふひ！」
くそ！ 笑うな！ 俺は悪くないぞ！ 椅子の耐久性の問題だろ今のは！

ゆつくりと立ち上がり、荒い息を吐きながら周りをざろりと一睨み。次俺のこと笑った奴は魔法でぶっ飛ばす。そんな気合を視線に込めた。

俺の思いが通じたのか、食堂は波が引いたように静かになる。

「あ。あの………… スロウ様。本当に朝ご飯いらないんですか？」

「おいお前黙れよ。それに見てわからないのか？ 俺はお腹一杯なんだよ。だからこれから朝ご飯あげますとかふざけたこと二度と言うなよインチキ美少年」

「い…………インチキ？」

「お前のことだよインチキ美少年野郎…………ほら！ とつとこの朝ご飯を片付けろ！ 目に毒なんだよおい！」

「…………あの。無理されてませんか？ お腹減ってないんですか？」

「は？ 誰が無理なんかしてるかよ。いいか？ 俺はこの外見だから勘違いされがちだな、意外と小食なんだよ。理解したなら復唱しろ」

「ス、スロウ様は意外と小食！」

「そうだ、それでいい。じゃあな」

けれど嫌な出来事というものは続くもの。

食堂から出ていく間際、俺のお腹が大きいうねりを上げてグーと恥知らずな音を鳴らしてみせる。

途端に中から聞こえる大爆笑。

俺は顔を発情期のオークのように真っ赤にさせながら、男子寮へと走り出したのであった。

「――魔法の使用には、皆さんもご存じでしょうが精霊に愛されることが何よりも大切です。さらに近年アカデミーが発表した最新研究報告を読み解きますと面白い仮説が記されています。火の精霊は熱い血を好み、水の精霊は優しい血を好み、土の精霊は真っ直ぐな血を好み、風の精霊は賢き血を好むことが明らかとなったというものです」

前世の俺なら魔法？ 精霊？ そんなてファンタジー世界ですか？ と言いたくなる言葉の羅列が俺の耳に飛び込んでくる。

話し手は生徒に立つ一人の女性。落ち着いた口調は猛烈な眠気を誘うと評判のアルル先生で、今も生徒の半分ぐらいは居眠りに精を出していた。

「精霊は先祖代々より受け継がれる洗練された貴族の血を好むと言われています。けれど平民の皆さんも心配する必要はありませんよ。このクルツシュ魔法学園を卒業した平民生徒の中には在学中に魔法を使いこなせるようになった者が数多く存在するのですから」

俺は階段教室の一番上の列を一人で占領しながらアルル先生の話を聞いていた。別になんか近くに座ることを嫌がっているわけじゃないぞ。誰も俺と同じ列や近くに座ろうとしないのだ。うーん、遠慮しなくてもいいんだけどな。俺は心を入れ替えたわけだし。

「魔法の威力を高めるために精霊が好むものを杖に埋め込むといったやり方も効果的です。例えば、かの高名な魔法使いデニング公爵は杖に風の精霊が好むアマの実を丸々一個すり

潰して埋め込んでいるとされています」

教壇のアルル先生からもチラチラと視線を感じる。きつと俺のことがボス豚みたいに見えるんだろうな。

「クルツシュ魔法学園は長い歴史から偉大な魔法使いを多数輩出しています。皆さんも先輩に続くよう勉強に励まないといけませんよ。それでは本日の魔法学の授業を終わります」

アルル先生の言葉にふんふんと頷きながら、部屋を出ていく生徒達を俺は眺める。気づいたことだが俺には友達がいなかった。いや気づくまでもなかったのだが、皆が俺を避けていた。気持ちとは分かる。こんな豚公爵と仲良くしたくないよな。

しかし俺は声を大にして言いたいのだ。俺は変わった、と。

でも実際に自分からそんなこと言い出したら変人確定。最近は意地悪とかしてないんだけど今までのイメージが悪すぎる。

俺は皆が部屋から出て行つてからのつそりと椅子から立ち上がった。

「ミスタ・デニング。今日は素晴らしいですね。まさか貴方が魔法の開祖とされている古の魔王の時代についてあれほどの知識を持っていたとは思いませんでした」

教壇で次の授業の準備をしていたアルル先生が俺に喋りかけてくる。

サラサラの茶髪は腰まで伸び、黒いローブを着ているために服の中の体形がどうなっているかは分からない。魔法アカデミーの研究者として数年働いた後、この魔法学園の魔法学の教師に着任。幼げな顔立ちだが、掛けられている丸眼鏡がどこか知的さを醸し出す。教科書通りの授業が退屈との評判だが、基本を大事にする先生だと俺は考えていた。

「大陸北方一帯を支配しているドストル帝国に対抗するために発足した南方四大国による同盟関係、通称南方四大同盟の一国。古の魔王は魔導大国の偉人であり、俺達が当たり前のように使っている魔法の開祖ともいえる人が生まれた時代ですから当然ですよ」

「あら。授業中に居眠りしなかったのも驚きですが、何だか今日のミスタ・デニングはいつもと違って非常に知的に見えます。ああ、そうでした。聞きましたよ、最近ダイエツトに取り組み始めたとか」

「さすがに太り過ぎだと気付いたので……ああ、先生、少しそのまま動かないで下さい」俺はアルル先生の前にどすどす歩いていく。目の前に立つとアルル先生は俺を見て縮こまっていた。さながら豚に睨まれた蛙である。先生ごめん、こんな豚公爵が前に立つたら威圧感があるよな。だけどそれを目にしたからには放っておけない。

「先生に迷惑を掛けたらダメだぜ」

その一言で悪戯好きな風の精霊が一体、先生の身体から離れ窓の外へと飛び立っていつ

た。あのままだったら何か悪戯をされていたに違いない。廊下で紙の束を持っている時に強い風が吹くとか、ロープがめくられてあれまっとなったりさ。風の精霊は六大精霊の中でも一番悪戯好きなんだよ。

「あ、あの？」

「それでは先生。失礼します」

頭の上にクエスチョンマークを浮かべたアルル先生に軽く会釈し、教室を出た。

普通の人には見えないこの世の不思議。実は俺、精霊が見えるんですなんて言ったら伝説の再来だって大騒ぎ、もしかしたら魔法を研究してるアカデミーに連れて行かれ、怪しげな研究の実験台にされる可能性もある。

それだけは嫌だ。つとブルブル震えながら廊下を歩き、次の授業に思いを馳せた。苦手な体術、けど豚公爵である俺は先生から運動場で走る許可でも貰おうと思う。噂に疎そうなアルル先生も俺がダイエツトをしていると知っているんだからスムーズに許可が下りるだろう。

何せ俺はデニング公爵家の人間だ。ダイエツトを出来るだけ早く成功させるために公爵家の威光を使うことに躊躇いはないぞ？ いっつも体術という名の取っ組み合いをしている皆に暴言を吐いて授業妨害をしていたことに比べれば運動場で走りたいなんて言えば先生

も涙^{なみだ}を流して喜ぶことだろう。

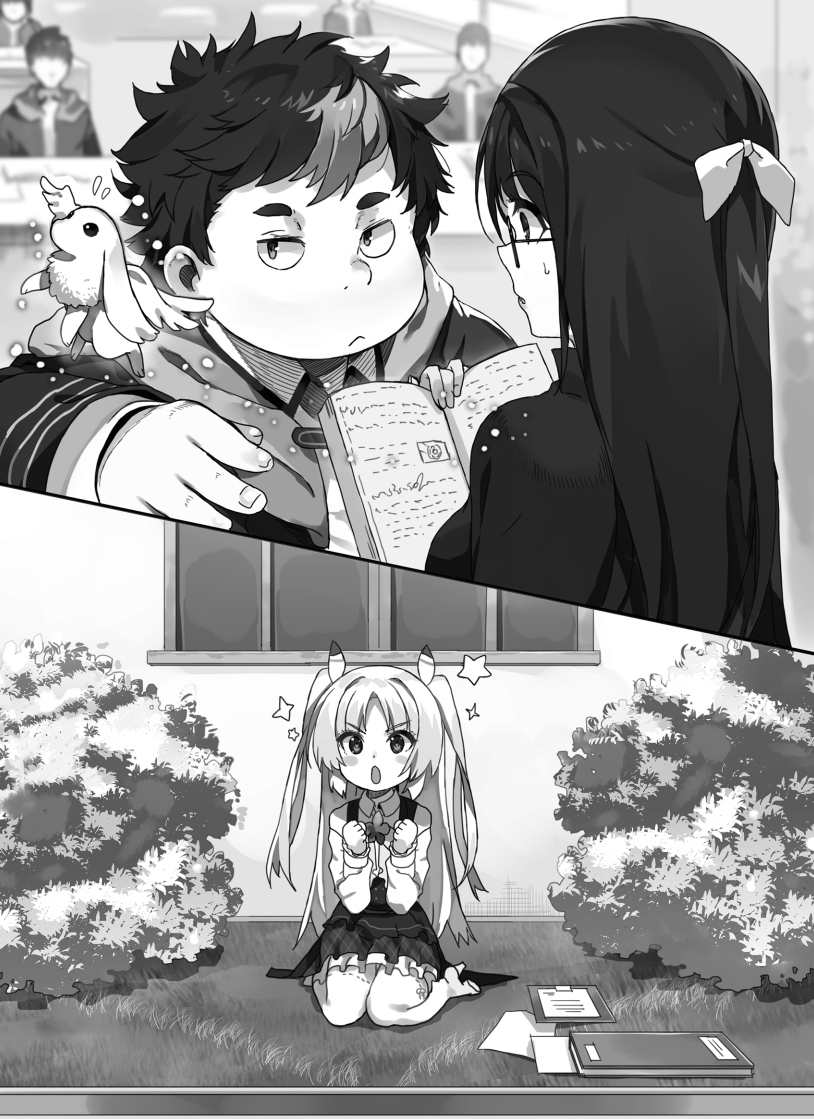
よし！ 早くダイエットに成功して細マッチョになるぞ！

「スロウ様があんなにズバズバと先生からの質問に答えるなんて……夢みたい……」
 透^すき通るようなシルバーヘアを肩^{かた}の先まで伸ばした少女がぼーんと口を開けて座り込んでいる。

「それにいつもと違って居眠りの回数がゼロ！ 魔法学の授業は居眠りが多発するって評判なのにこつくりこつくり居眠りしなかったのはスロウ様だけ……これって夢？ あ……いたあい」

彼女は校舎の外からガラス窓を通し、魔法学の授業が行われていた教室をずっと覗き込んでいたのである。目的はモンスターであるオークの生態観察、ではなく彼女の主^{あるじ}である少年の授業態度を観察するためだ。

「今日からダイエットのために毎朝ランニングするって言うてるし……スロウ様に一体何があったんだろう……悪いものでも食べたのかな……スロウ様雑食だからなあ……」



テストの点数は良くても授業態度は最悪。学園の先生方からはむしろ居眠りしてくれた方が遥かにマシと評される学園の異端児。

普段は穏やかなアルル先生に答えるよう指名されても「空きれい」とか「すっぱいリンゴ」等、とんちんかんな迷解答を連発していたスロウである。

だけど今日に限っては誰もが解答に窮した先生からの問いにスラスラと答え、教室にいた者は皆目を丸くしてスロウを見ていた。それは外からこっそりと教室内を覗いていたシヤロツトも同じ。

「でも……もしもだよ？ もしも本当にスロウ様が良い子になるのなら手助けしてあげなきゃ……スロウ様が瘦せれば私の従者としての評価も上がってお給料が上がるかもしれないし……」

何かを決断したらしい見目麗しい少女は握りこぶしを作り、そそくさとその場を去っていったのであった。



ダイエットを開始してから数日がたった。

端的に言うくと、地獄のような毎日だった。

脂肪に包まれたこの身体を瘦せマッチョにするには忍耐が必要だ。どれだけ悪口を言われようとも俺はダイエットのために肉体を酷使し続けた。

そんな地獄のような毎日でも楽しみというものは探せばあるものだ。

ビジョン・グレイトロードというインチキ美少年を覚えているだろうか。まあアニメにも出てこなかったモブキャラだから覚えてなくても仕方ないよ。あいつだよあいつ。俺に朝食を献上するとか言い出したあいつだよ。

俺は万能のアニメ知識をゲットした日からデリバリー朝ごはんをすっぱりと止め、毎朝食堂へ通うようになっていた。

だけど一人寂しく朝ごはんをばっくんちよしているわけじゃない。

朝食献上マンと化したインチキ野郎があれから毎回話しかけてくるようになったのだ！ 会話の内容は授業や学園の噂話といったたわいのないものや俺を持ち上げるおべっかとか様々だ。若干こいつ何でこんな俺に媚びてんの？ とか思うけど、友達のいなかった俺にとっては新鮮で楽しい時間であることは間違いない。

もうあいつとは友達って考えてもいいかもしれないな。いやあ、やつぱり分かる人には分かるんだなあ。俺が真っ黒から真っ白に変わったってことがさ。

そして、ようやくこの時間がやってきた。

机にかじりついでる座学ではなく、実践形式として行われる魔法演習の授業の時間だ。

目標の一つである友達作りにこれほど有意義な授業もないだろう。

俺はどっすんどっすんと走りながら魔法の練習用に整備された演習場に近づいていく。

「相変わらずでつかい音で走ってるな豚公爵……」

「ああ豚公爵かよ……オークキングが学園を襲撃したのかと思ったわ……」

だだっ広く刈り取られた草むらは所々焼け焦げていたり、水溜りがあったり、落とし穴のような穴ぼこが発生していたりと荒れ放題。魔法演習の授業で使われる演習場は変な魔法現象が起こっても周囲に波及しないよう校舎や寮がある学園の中心部からは離れた場所に作られている。

まあ学園の生徒が使う魔法なんてたかが知れてるんだけど、たまに魔力が暴走して可笑しな魔法現象を引き起こす奴がいるんだよ。

「ふっふっふ、腹が鳴る……じゃなくて腕が鳴るぜ」

何をかくそう俺はこの魔法演習の授業が大好きだった。

だって先輩である第三学年の生徒を含めても、この魔法学園で俺より魔法が上手い生徒はいないからな。魔法演習の授業は俺の独壇場なのだ。ぶひぶひ。

「おーい。ひよっこ共集まれー、ほらダーッシユー走って集まれー、全力ダッシユしろー」

魔法演習の授業を担当している先生の方へと歩いていく。

バリッとした黒シャツは見事に鍛えられた二の腕の辺りまで捲り上げられ、服の上からでも先生が鍛え抜かれた身体をしていることは容易に想像出来る。

だが、その外見が問題だった。

奇抜な黒いアフロ、何だその髪型ふざけんな。以上。

先生の癖に俺たち以上に自由を謳歌しているあの人が魔法演習を担当しているロコモコ先生である。

「魔法演習の授業を開始するぞー。ひよっこ共こっちこーい。はい、3、2、1」

されど、侮るなかれ。

貴族の生徒達がストレス解消とはかりに魔法をぶっ放すこの授業には何が起こつても即座に対応出来る優れた先生が必要であり、幸いにしてロコモコ先生はそんな魔法演習の授業にぴったりの人材だった。

「おーし。ひよっこ共全員揃ったなー」

何せロコモコ先生はクルッシユ魔法学園の学園長が王室騎士団から直々に引き抜いてき

すこうで
た凄腕なのだ。

ダリス王室を守るために組織された王室騎士団。

彼ら王室騎士のみが着用することを許される白マントは貴族の憧れであり、騎士団を構成する王室騎士達はそれぞれがとんでもない凄腕の魔法使いだ。

「ロコモコ先生。全員揃ってませーん」

「今ここにいない奴はサボりつてことで授業始めるからなー」

さて、これから始まる魔法演習の授業はそんなロコモコ先生が指定する様々な魔法を生徒がぶっ放してロコモコ先生が改善点を述べていくつてスタイル。軽い怪我なんて日常茶飯事だ。

「今日は二人組作ってもらつてーお互いに相手の魔法のダメな所を言い合ってもらうぞー。そして言われたことをレポートに纏めて提出し来週までに出来るようになってることー」

悪魔の言葉かよ！

俺は茫然としてその場に立ち尽くし、ふらふらとゾンビのようにゆっくりと辺りを見渡した。他の皆はそそくさとペアを作つてゆく。中には仲良しの恋人と組むリア充の姿も見え、俺はぶるぶるとその場で震えるばかりだった。

当然、俺はその場にぼつんと取り残される……ふざけんな組む相手いねえよ！ だつて俺はこの学園で一番の嫌われ者！ 全くよう、よくそんな鬼畜なこと思いつきますねロコモコ先生！

「……いや、まてよ？」

二人組……魔法の打ち合い……パートナーー。

おいおい、これはもしかして友達作りの絶好の機会なんじゃないか？ そうと分かればさてはて誰が残つてる人はいないだろうか。魔法のエキスパートである俺が優しく教えてあげるとするか。

だけど、余っている子はどこにもいなかった。

あれ、可笑しいな？ 皆友達いるの？ すごいね……。じゃあ豚公爵は一人で魔法ぶっ放すことにしますね……。ほんとに誰も俺と組みたい人いないの？ ……うん、まあ俺友達いないし、学園一の問題児だからね。

俺がとぼと組む相手のみつからない演習場を放浪していると、魔法演習の時間帯だというのに杖をぶんぶんと振り回しているだけの可笑しい集団を見つけた。

「あれは……平民か」

魔法が使えない平民生徒が演習場の一角に固まっている。

一年生だろう見覚えのない新入生達が必死に魔法を使おうとしているのだろうけれど、その様子は俺にはただ杖を振っているだけに見えなかった。

それに彼らの周りには形容しがたいどんよりとした空気が漂っている。

「――あ」

そんな集団の中に俺は見覚えのある子がいることに気付いた。

アニメ版主人公のハーレムに潜り込んだ色恋に積極的な平民生徒。ハーレムをかき乱す彼女の裏にはシモネタ知識やモテ仕草を教え込んでいた黒幕がいたのだ。

それは――。

「――ティナ」

アニメ視聴者の中でも一部からは、ええい主人公のハーレムはいいから、エロ本魔王にスポットライトを当てろと言われていたぐらい人気があるサブキャラで、アニメの中に出てくるとつい目で追っちゃう、俺もかなり好きなキャラクターだ。

艶やかな長い黒髪を後ろで纏め、スラリとしたスタイルが特徴的な健康的な女の子。さらにアニメの中では隠れてない巨乳、全然隠れてないエロ本魔王とまで言われていた大きな胸が制服を下から押し上げている様子をはっきりと肉眼で確認出来た。

「えっと。デニング様ですよ？ 何でこっちを見てるんですか？」

こんなこと言うとおれだけど、シャーロットには無い危険な色気を持っている女の子。見かけだけは真面目そうな女子生徒だけれど、その実態は恐るべき耳年増でありエロ本魔王。

アニメの中では学園に平民文化の極みらしいエロ本を流通させて大金を稼いでいたやりの少女。娯楽が少なく世間知らずが多い貴族生徒にはエロ本の表紙見ただけでイチコロですから、とアニメ視聴者も呆れかえった金策を実行した強心臓の持ち主だ。

そんな裏表のあるティナが杖をしまい、俺を見ていた。

「もしかして組む相手がいないんですか？ でも私たち、誰も魔法使えませんが……すみません、先輩」

「……いや。えーと、組む相手がいないのは君の言う通りなんだけど」

「あ、そこは否定しないですね」

「まあ事実だからさ……それより君達多分、一年生だろ？ よかったら俺がアドバイスしてあげようか？ 何だか手こずってるみたいだしさ」

平民である彼らがアドバイスくらいで魔法を使えるようになるなんて有り得ない。だから俺の言葉はちよつとした気の迷い。アニメの人気サブキャラと喋ってみたいという邪な気持ちから出たものだ。

「ええ！ 本当ですか!? 宜しくお願いします、実は私たち途方に暮れてましたので！」
 「おいティナ！ ぶ、ぶた……あ、いえ、この方はあのデニング公爵家の方だぞ！ アド
 バイスなんてなんと恐れ多い……」

固まる一年生達とは対照的にティナだけはぺこりとお辞儀をする。

その際に見えた柔らかな曲線を描く胸の谷間。

俺はびくんと固まってしまった。うう、恐るべしエロ本魔王。まさかこんな所でラッキ
 ーを体験出来るとか、うう、恐ろしい恐ろしいぶひよ！

だけどティナ以外の平民達は背筋をぴつと伸ばし貴族生徒と平民生徒の間にある壁を象
 徴するように畏まっている。それも当然か、デニング公爵家はダリスで一番の大貴族
 だからな。

それでもティナは彼らの間から一歩前に踏み出して俺を見つめている。

「いいっていいって。確かに俺はデニングだけど真っ白になったんだからさ」

「？ 真っ白って何ですか先輩？」

「ああ、ごめんこっちの話。それでアドバイスだけど、簡単だ。イメージ、これだけだよ。
 使いたい魔法のイメージが克明であればあるほど成功率が上がる」

「イメージですか？ でもそれってロコモコ先生が教えてくれたことと同じですよ？」

「全然違う。火の熱さを、氷の冷たさを、風の優しさを、土の感触を。見た感じではそこ
 まではっきり想像出来ている人はこの中に一人もないかな。さて、この中でアル先生
 の魔法学を取っている人はいるかな？」

すると、全員が手を挙げた。

「初回の授業で学ぶよね、精霊は平民の血に興味を示さない。だから平民の君達が魔法を
 使えるようになるのは非常に難しいってことをさ」

魔法学の授業でアル先生が言っているように精霊達は平民の血に興味を示さず、力を
 貸すことはごく稀だ。

「……それ、ずるいですよね。貴族だから魔法が使えるとか、平民に生まれたから魔法が
 使えないとか。とってもずるいですよ。そんな中でも先輩みたいなデニング公爵家出身な
 んで最強にずるいですよ……」

ティナは俺の背中越しに演習場ではしゃいでいる貴族生徒達をにらみつける。

火の球を空に向けている者がいるかと思えば、指先に拳大の水を纏わせている者もいる。
 あちら側には魔法の使えない生徒なんて一人たりとも存在しない。

「それと貴族をチラチラ見ることはやめること。どうしても気になるっていうのなら、い
 つそのこと感情を剥き出しにしたほうがいいかもしれない。心に秘めるのではなく、自分

のやり方で精霊に気持ちを伝えるんだ。そちらの方が余程精霊に好かれるだろう。あと、デニング公爵家に關して言えば魔法を使うことにかけてはこれ以上の名門はないだろうと言っておくよ」

「名門。そうですね、デニング公爵家は大貴族……」

ティナは悔しそうに唸った。

デニング公爵家。この大国、ダリスで最も力のある貴族の名前だ。

平民の皆さんは俺が誰であつたのかを思い出したのか、一步と言わず何歩も後ずさる。だけど、ティナだけはじつと俺を見つめていた。

さて、次は誰に声をかけようかなー。

俺が次なるターゲットを探そうときよろきよろしていると突然背後で声が聞こえた。

誰かを罵倒する嫌な大声。貴族の間で何やら揉め事が起こっているようだった。

けれど魔法演習の時間にはよくあること。

ダリス貴族において魔法は力。特にこんな年若き生徒が多い場では魔法技術に対するちよつとした優劣の差がどうしようもない壁となつて諍いの原因となるものだ。

「毎日毎日お前よくあれだけ豚公爵に取り入る真似なんか出来るよな！ 陰で散々豚公爵つてバカにしてたくせによ！ おいビジョン！ 何とか言つたらどうなんだ！」

衝撃の事実には俺は固まる。

あ、あああ、あの野郎！

毎朝一緒にご飯を食べたり食堂で椅子をぶつ壊した時にも何度も手を差し伸べてくれたのは、俺に取り入ろうとしていただけなのかよ！

俺は目を細めて、ビジョンの表情を読み取ろうと試みる。

何か言いたいことがあるなら聞いてやるぞ、おい！

するとあいつは真つ赤な顔をして頭を下げ、プルプルと震えながら杖を握り締めていた。

……いや、傷ついているのは俺の方だから！ 何日も掛けて俺を信用させやがって！ ただの陰口よりもよっぽどダメージでかいっての！

「最近はかなり切り詰めて生活してたみたいだし、あのデニングに媚びて金貨でももらおうってか。よく見りゃお前の杖つて平民が使うような安物だしな！」

「馬鹿にするな！ 最近の杖は君たちが考えてるより質がいいんだ！ それにこの杖を使つて僕よりも君たちの方がよっぽど魔法が下手じゃないか！」

「何だと！ やるのか貧乏人！」

皆があいつらの言い合いをはらはらしながら見守っている。

「でもビジョン！ お前、媚びる相手を間違えたんじゃないのか!? 豚公爵の話題はデニング公爵家ではタブー扱いあつかされてて、家族からもとつくに見放されているってよく聞くぞ！ そんなあいつに媚びたって落ち目同士傷の舐め合いしてるようにしか見えないぜ！」

あ、うん。その通りです。

家族だけじゃなく、幼い頃から付き従っていた騎士二人も俺から離れたしな。領民でさえ、俺のことを話す際は一段声のトーンが落ちるらしい。

ビジョンは捨てられた子犬のような目で俺を見つめている。何だか見るに忍びないので俺は正直にビジョンに言うことにした。

「あいつらの言う通りだ。お前間違えてるぞ、媚びる相手」

「ははは！ デニングにも捨てられちまったなビジョン！」

「うるさい、君たちには関係ないことだ！ それに僕の杖が安物だと!? なら市販の杖でも、オーダーメイドの杖を使っている君たちよりずっと上手に魔法を扱えることを証明してやる！」

高らかにそう言って、ビジョンは大きく杖を振るう。

風の精霊がビジョンの気持ちにこたえようと友達の精霊達を集め出した。今この場は演習場、様々な属性の精霊があいつのもとに寄って行く。

「風と炎の精霊よ！ 僕の声に集え！」

俺はビジョンの様子を見て青ざめた。

あいつの必死さを面白がって水や土の精霊、さらには闇の精霊まで集まってくる。

あ、こら！ だから、お前ら今のビジョンに力を貸すなつて。

今までビジョンをからかっていた男子生徒達もビジョンの危うさに気づいたのか距離を取り始める。

「おい暴走するなよビジョン！ 冗談だつて！」

「先生あそこ、あそこっ！ ビジョンがやばいです！」

遠くでロコモコ先生がビジョンに向かって杖を振るう姿が見える。土の魔法を得意とするロコモコ先生がビジョンの魔法を相殺しようと声を張り上げていた。

ダメだ、その距離では絶対に間に合わない。

「おい暴走するなよ貧乏貴族！」

「黙れ黙れ黙れ！ 僕を貧乏貴族だとかあざけた名前前で呼ぶな！ 僕の家は歴史と名誉ある伯爵家だぞ！ 家柄の格というものを考えたまえ！」

ビジョンに群れる精霊達が一斉に力を解放せんと目を輝かせている。
ああもう、精霊ってのは厄介だな！ 数さえ集まればビジョンでも上級魔法にも匹敵する魔力をぶっ放せるんだから！

でもよく見ろよ、今の興奮したあいつが魔法を制御出来る訳がないだろ！

「豊饒に愛されしグレイトロードの血が紡ぐは天に叫ぶ熱き風流ッ！ 荒ぶる風よ、炎を纏いて巻き上げれ！ 風炎の竜巻ッ！」

ビジョンの目が血走っている。周りの生徒の説得が届いている気配も無い。

ああもうまずい、まじで暴走する。くそ、ロコモコ先生の魔法も間に合いそうにないしこうなったら仕方ないよな！

「——ッ」

「おーら精霊共ッ、きびきびと働けよーッ！ 土砂よ壁になりてッ！」

俺の行動より僅かに遅れて唱えられた先生の声に従い、地面がよきによきと盛り上がり土壁となつて目の前に出現する。暴走元であるビジョンから近いほど、土壁は大きく厚みを増していた。驚くべきことに演習場にいた全生徒の目の前に固い壁が生まれている。

「ああ何も起きてねえだとは？ ……不発か、おーいひよっこ共そんなびびらなくていいぞ、安心しろー」

ロコモコ先生の声が響く。

風の魔法で自分の声を風に乗せて、拡声器のように響かせているようだ。

「授業は終わりにするぞー。ほーら、解散しろー解散解散ー。宿題も無しだー」

先生が再び杖を振るうと土壁はさらさらと風に流され地面に還る。

ばたんと音がして、そちらに目をやるとビジョンがくすおれたところだった。

ビジョンに纏わりついていた有象無象の精霊達は既にちりぢりに逃げ出し、結局、風と火の二重魔法、風炎の竜巻は発動しなかったようだ。けれど、あいつが精霊に与えた魔力は戻ってこない。魔力切れ、暫くは最悪の気分だろう。

「そうだよな、幾らビジョンが魔法が上手いからって上級魔法なんて使えるわけないよな」

「おい、見ろよ。豚公爵がビジョンに近づいてるぞ。何する気だ？」

さっきまであいつをからかっていた奴らは安心したのか、元氣を取り戻して騒いでいる。うるせえ。それに何もしないって。俺はただあいつの体調が心配だから確認するだけだよ。ほんと、それだけだって。全然、まじで全然ショクなんて受けてないから。

「ぶほい」

足が滑った。わざとじゃないぞ。ビジョンの身体に俺はダイブする。秘技、のしかかり。

「……ぐほおっ」

ビジョンがとんでもない声を出して、陸に揚げられたエビのように痙攣を繰り返す。

「豚公爵がビジョンにトドメさしたぞ……」

「次はビジョンが苛めのターゲットにされるんじゃないか？ 前に授業中暴走して、豚公爵にネチネチ言われ続けた奴がいただろ。もうビジョンに関わるのは止めた方が良さそうだな……俺たちまで豚公爵の目に入ったらたまらねえ」

畏怖の視線が向けられ、俺はお昼の挨拶とばかりに文句あるかと皆を威嚇してやった。

「だけとビジョン。覚えてろよ？ 明日から、え？ デニング様？ どちらのデニング様ですか？ とか無関係装ったら泣くからな。うーん、脅しのためにもう一回のしかかっていた方がいいかな？」

俺が秘技の準備をするためもう一度あいつに近づこうか迷っていたら、ロコモコ先生の声がまた聞こえる。

「いいかー？ 今のは教訓にしとけよー。乱れた心で杖を振るうとろくな目に遭わないってことがよく分かったろー」

俺は騒動の関係者じゃないし、逃げるか。

……でもまあよく分かったよ。

今更友達を作ろうと思っても、そう簡単にいくわけがないんだってことがさ。



「貴族の癖に暴走してるんじゃないわよ！ お陰で授業途中で終わっちゃったじゃない！ やっぱバカ！ 私たち平民のこと何にも考えてない！ バカ貴族めえ！ 何で小さい頃から魔法使ってる癖に今更暴走しかけるのよ！」

生徒が滅多に訪れない古びた研究棟の脇。

生い茂る雑草の陰が少女の秘密の練習場所だった。

「もう……！ 一体全体どうすればいいのよ！ ぜんっぜん上手くいかないじゃない！」
幼い頃から家の手伝いを精力的にこなした、貴族の学び舎であるクルッシュ魔法学園の入学資金を貯め続けた。忙しい宿屋の娘でありながら勉学に励み、クルッシュ魔法学園に見事合格。

平民でありながらも貴族生徒を中心にした学園で努力を続ける理由はたった一つ。

「魔法よ起これ！ ほらっ早く！ 魔法魔法魔法ッ！」

けれど入学した後には現実を知った。

平民の出自でクルッシュ魔法学園に入学した先輩たちの大半が魔法の習得を諦めている

現実を。そして第二学年に進級する頃には魔法関係の授業を殆ど取らなくなる姿をティナは目の当たりにしてしまった。

魔法は貴族のもので、精霊は平民に靡かない。

「うるさい！ そんなこと知ってるっての！ 平民が無知だと思ってるの！」

心の隅ではいつも貴族に対する嫉妬が渦巻いていた。

自分だけでなく、クルッシェ魔法学園に通う平民の誰もが妬んでいる。

けれど、正直になろう。

心の底で妬むぐらいなら曝け出せ。

そこが出発地点だとあの人は言っていた。

この国で一番の大貴族、デニング公爵家に連なる貴族の生徒。たとえ落ちこぼれの豚と言われていても、彼が魔法にかけては天才と評されている事実をティナは知っていた。

「こつちがどれだけ頑張ってると思ってるのよ——！！ 毎朝早起きして、何万回意味なく杖を振ってるって思ってるのよ——！！」

ティナはてしつ、てしつと近くにあった草むらを蹴り飛ばす。普段の真面目ぶった彼女であればありえない行動だけど、こんな朝っぱらじゃ誰も見ていない。

貴族や異性の生徒達には決して見せない裏の顔、猫をかぶるのは得意だった。



「ふざけんなふざけんな！ 私がどれだけ努力してると思ってるの！ 報われて、報われてよバカヤロー！ 私の努力報われなさいよ！ 何が玉の輿よ！ 魔法が使いたいからクルッシュ魔法学園に頑張って入ったのよこっちは！ 平民の女の子が皆玉の輿狙ってるわけじゃないってのバカ貴族！」

スタイルのよい身体つき、豊かな胸が制服を押し上げ、両親からはその身体で貴族をゲツトしてこいと言われたことを思い出す。

なにせ、彼女がいるこの学園はクルッシュ魔法学園だ。

騎士国家ダリスの国中から貴族の若者が集まる教育施設。稀にだが、数少ない平民の生徒と恋に落ちる貴族だって存在する。

彼女は両親からそういった方面での活躍を期待されていた。

「魔法のために本も読んで一通りの知識も詰め込んだ。でも先輩達が魔法関係の授業を取らなくなった理由も分かるわ！ 結局最後は血の尊さが魔法を呼ぶなんて詐欺みたいなもんじゃない！ それに貴族の人達を意識しすぎるのは悪影響って……意識しないわけにはいかないじゃない！ だってあいつら！ 皆、魔法使ってるんだもん!!」

魔法演習が終わった後、彼女の友達や先輩達は豚公爵の言葉なんて信じることはないと言っていた。あいつは落ちこぼれ、デニング公爵家の墮ちた風だから、と。

でも彼女は受け止めた。

あの時、彼の言葉に嘘があるとは思わなかったからだ。

「知ってるっての！ 耳にタコが出来くるくらい聞いてるっつの！ 精霊が平民に力を貸してくれないことぐらいさ！ どんだけよ！ どんだけ精霊あれなのよ！ これってあれでしょ！ イケメンが貴族様以外は恋愛対象外っていう町娘と同じかよ！ 精霊どんだけよ！ 私達と何も変わらないじゃない！ 俗に塗れすぎでしょ！」

クルッシュ魔法学園に入学するような平民の子の多くは魔法が使えるようになることを夢見ている。

けれど、そんな奇跡は滅多に起こらない。

魔法関係の授業に出席する平民の生徒は時間の経過と共に減っていく。

「そうよ、嫉妬しかないわよ！ 何が貴族よ、ずるすぎじゃない！ 精霊は洗練された血を好むって何それ！ 私達平民の血を見下すっての！」

クルッシュ魔法学園に入学して、貴族の生徒と言葉を交わしたのはあれが初めて。

何かの縁かもしれない。だからあの自堕落な先輩の言葉であつてもティナは愚直に信じることにした。

——心に秘めるのではなく、自分のやり方で精霊に気持ちを伝えるんだ。

「認めるわ。私は嫉妬の塊で……でもこれが私なの。玉の輿を狙ってクルツシュ魔法学園に通うなんて馬鹿のすることって思ってる。ねえ、精霊さん。私ってこんな人間なの。ひどいでしょ？ でもね、これが私なのよ」

げしつ、げしつとぼうぼうの雑草に八つ当たりしながら杖を振るう。

イメージするのは地面から土が隆起して、泥の人形を作り出す光景だ。

「魔法よ起これー！ ふざけんなバカヤロー！ 魔法！ 魔法！ 魔法が使えるようになりたいから私は頑張って入学したんだっつの！ バカ貴族に色目使うためじゃないっつの！」

まるで杖を遠投するかのような乱雑な振り方。頑張って貯めたお金でようやく購入出来た杖はもうボロボロ。けれど彼女はそんなこと構いなしに何度も何度も杖を振るった。

「ほら魔法！ さっさと魔法！ クリエイトゴーレム！ ゴーレムゴーレムゴーレム!!」

するとティナの目の前で奇跡は起きた。
地面から拳大の土塊が浮かび上がり、目の前でぽとりと落ちる。

たったそれだけ。

とてもじゃないがクリエイトゴーレムなんて呼べない、彼女が望むモノとは違う不細工を通り越した先にあるものだ。

「嘘、でしょ……………」

されど彼女にとっては神様から与えられた天上の霞のようなご褒美に違いなく。

「せ、成功、しちゃった……………つやばい、成功しちゃった……………」

土の精霊は知っていた。

彼女がどれだけ頑張り屋で熱心に杖を振っていたかを知っていた。平民達は確かに魔法を目的にクルツシュ魔法学園に入学するが、彼女ほど強い意志を持っているものは稀だった。

ちよこつとムツツリ、いやとんでもないムツツリなのはご愛嬌。たとえ裏表があっても、彼女がストイックなことに変わりはなく。

そんな彼女のことを土の精霊達は好きになりつつあるのだった。

「で、出来た……………すごい……………びつくり。ていうか……………天才だ……………私……………大天才だ……………」

ティナがぶるぶると震えながら、べたんとその場に座り込んだのも無理はない。平民入学生が学園に入学して、これほどの短期間で魔法に目覚めるのは非常に珍しいことだった。だが、直後。

「……………ふほつ」

誰かが噴き出す声を聞いた。

ティナは座り込んだまま、恐る恐る振り返る。

どうか聞き間違いでありますように、誰もいませんようにと、願いを込めて。

「あ、やば。気付かれちゃった……でも、俺あの。俺は何も見えないから……君が皆の前では猫かぶってるとか、実はメチャクチャ口が悪いとか。全然知らないから」

「……」

「じゃ、そういうことだから」

そう言っておびおびと言いながら走る少年の後姿をティナは見つめ続けた。少年の背中が次第に小さくなり研究棟の角を曲がって見えなくなるまでティナは見つめ続けた。

騎士国家ダリスを守る大貴族、風のデニング公爵家三男。

豚公爵こと、スロウ・デニングが去っていく。

どことなく笑っていたように見えるのは自分の気のせいだろうか？

「気のせいなんかじゃないわよ！ 全部見られてたの!? うそ！ うそよッ！ 私の学園ライフがッこんなにも早く崩れ去っちゃうなんて！ しかもバカ貴族様に見られた！」
うららかな春の日ざしに照らされて、彼女の頬が羞恥に染まった。



翌朝。

俺がメイドにお願いして用意してもらったでっかい椅子に座って朝ご飯を掻っ込んでいると、目の前の席に誰かが座った。

何だ何だ？ 俺のぼっちライフに侵入しようとするなんて度胸あるやつがいるもんだな。

「おはようございます」

「ん？ ……お前か」

視線を上げると見覚えがある奴。インチキおべっか魔法暴走美少年がげっそりした顔で立っていた。金髪のツヤも無いし、貴公子然としたイケメンが台無しだ。

ビジョンは俺の目の前に座るとはあと息を吐く。ふざけんな、ため息つきたいのは俺のほうだったの。

「……ひどい顔してるなビジョン。多分だけとお前、殆ど寝てないだろ」

「よく分かりましたね……実は寮の一階に移るため、夜通し引越しをしてたんですよ」

「一階？」

「寮の一階です。生活費が十分安くなると学園長に聞いて三階に移ったんですよ」

「……えっ？ まじで？」

「まじです。一階の平民部屋は噂通りのタコ部屋で本当に驚きましたよ。それにしても二段ベッドというものは画期的ですね。平民の知恵というやつですかあれが。おかげで寝不足だ、平民というものは実にいびきがうるさい……はあ」

俺は顔を上げ、インチキおべっか美少年を見つめた。

貴族が男子寮一階の平民部屋に移るなんて聞いたことがないぞ。確かに生活費はぐっと抑えられるけどブライドとかは大丈夫か？ お前特にブライド高そうじゃん。昨日家柄と格とか言ってたし。

「あの後学園長からお説教を受けましたよ……最悪だ……。学園長の部屋に呼ばれるなんて名誉なことですから、本当はもっと別の用事で訪れたかったのに……。王室騎士への推薦とか」

「お前が王室騎士だって？ あれぐらいの魔法も制御出来ないようじゃ無理無理。王室の方々を守るところか逆に怪我でもさせようもんなら大惨事だぞ」

「……………全くです。はあ、これで暫く僕は学園の笑いものでしょうね」

自嘲気味にビジョンは笑う。

まあ仕方ない。俺達は生徒とはいえそれぞれが家を背負っている貴族なのだ。

新入生ならまだしも、第二学年の生徒が暴走するなんて滅多にないこと、これでグレイロード伯爵家の株も下がるだろう。

「あつ、そういえばお前俺を騙してたんだよな。なあおい、貧乏っちゃま。何が俺の努力に感銘を受けて朝食を献上するだ、ただデニング公爵家の力に頼りたかっただけじゃねえか。全く、お前は本当に意地汚い貴族みたいな奴だな」

「……ちよっと待ってください、何ですかその、貧乏っちゃまってのは。限りなく僕の名誉が貶められている気がするんですが」

「貧乏ですぐキレる。授業中に皆に迷惑をかけるお前にはピッタリの名前だ」

「まあいいですよ、何だって好きなように呼んでください。それより朝食まだ食べてないんですか？ もしかして僕のことを待っててくれたとか」

「ふん。おい、食うぞ。気持ちが悪くて落ちてる時は食べるに限る。俺はそうやってこれまで生きてきたんだ。ほらっ、食え食え」

むしゃもぐ、がつがつ、ぱくむしゃがつ。

俺たちはお互い言葉を交わすことなく無言で朝食を食べ続ける。

大きな食堂に問題児が二人、辛辣な視線が俺たちを包み込む。俺は慣れたもんだけど、

こいつはそうもいかないだろう。

「……ここだけの話ですが、いいですか？」

「何だよ」

「僕が最近貴方あなたを持ち上げたのは本心ですよ、確かにちよつとした打算はありましたけれど、もつと身近で貴方の変化を確認かくにんしたいと思つたから話しかけたんです」

「……今度は俺をおだてて朝食を奪うばおうって魂胆こんたんか？ その手には乗らないからな」

「何言ってるんですか。僕のご飯、結局一度も手を付けなかったじゃないですか」

「当たり前だろ、俺はダイエツト中なんだよ」

「そうですね、ダイエツトの大原則はまず食事制限から。……だからもうご飯の献上はやめます、ご馳走様ちそうさまでした」

「へえ、俺よりも食べるペースが速いじゃんか、誇ほつていいぜ」

「貴族がそんな下らないことで誇るわけじゃないですか」

「っち、つまらない奴だなあ。あ、おいお前もう行くのか？ もう少しで食べ終わるからちよつと待ってくれよ」

「……やっぱり貴方は変わりました。朝のランニングも一人分の朝ご飯しか食べないこともそうです。それに何より——昨日、僕を助けてくれた風の魔法は昔と同じように優やさしか

つた。これで貴方に助けられたのは二度目だ」

「はあ？ ……………何の話だよ」

「しらばつられても無駄むだです。二度目というのは実は授業中と同じように昔、貴方に風の魔法で気絶させられたことがあるんですよ。きつと貴方は覚えていないでしょうが、構構いません」

開けつぱなしの食堂の扉しりぞから一陣の風が飛び込んでくる。

「このクルッシュ魔法学園に入学して、ようやく本当の貴方に出会えた気がします。けれど、残念ですね。あのスロウ・デニングが本気でダイエツトに取り組んでいることに気づいたのは今のところ僕だけのようだ。だからこれは、僕だけの特権ということにしてください」

頭がクリアになり、視界もはつきりとした。

貧乏つちゃまは空になった食器が載のつた銀のトレイを持っているけれど、王宮の舞踏会ぶたうでも主役を張れそうな晴れやかな笑みで俺を見つめていた。

「嘗ちかて、ダリスーの大貴族、風のデニング公爵家が世界に誇った風の神童」

そこには学園長に叱しかられたとしよげていた先程までの情けない姿はどこにもない。

「何やら本気で改心したらしいスロウ様の友達一号は、この僕ということだ」

花咲くような笑顔で、男子寮一階、平民部屋の貧乏貴族、アニメにも出てこなかったモブキャラは爽やかに笑うのだった。

友達作り、それはダイエットと同じぐらい価値ある俺の目標だった。

なのにまさか、こんな早くに友達が出来るなんて自分でも信じられない。その事実を専属従者である彼女に伝えるため、午前の授業を終えた俺は校舎内をひた走る。

「ぶっぴいひいひいひいひいひいひい」

「豚公爵がすごい勢いで下りてくるぞ！ みんな怪我をしたくないなら道を空けろ！」
従者としての仕事は主に二つに分けられる。

一つ目は学園で日常生活を行う高貴な貴族生徒のお世話だ。教科書を持ち運んだり暇潰しの本を読んであげたり、学園正門から伸びる街道の先、ヨレムの町まで馬に乗って買い物をしてきたりと、簡単に言えばバシリだ。うん。

二つ目は家との連絡だ。

学び舎で生活している生徒の様子を克明に手紙に記したり、家からの秘密の連絡を生徒に伝えたり、要は連絡係だ。うん。中には家に遊びまくっていると知られたくない主の命令で仕方なく、真面目にやってます超真面目ですなんて誤魔化す従者もいるらしいが。

「ぶっぴいひいひいひいひいひいひいひい」

「一年はとりあえず逃げる！ 邪魔をしたらどんな嫌味を言われるか分からないぞ！」

ちなみに俺の従者であるシャーロットは割と自由だ。デニング公爵家のようなスバルタの家からようやく離れたので、彼女には学園では伸び伸びと過ごしてほしいからだ。シャーロットにお願いしているのは俺専用の特注の制服を用意することぐらいである。

あ、少し前までは朝食をわざわざ自室にまで持ってきてもらってたな。

「肩が豚公爵とぶつかったあああ、誰か医者を呼んでくれ！ 俺の肩があああああ」

ちよつとぶつかったぐらいで大袈裟すぎるだろ、もしかして俺から慰謝料でもせしめようって魂胆か？ その手には乗らないぞ。俺には金が無いからな。学園の問題児だけじゃなく、デニング公爵家でもない子扱いされてる俺に毎月送られるお小遣いはメチャクチャ少ないのだ。

というか身体のキレがいい。

自分の思い通りに身体が動く感覚は本当に久しぶり。でも、きつとこれはダイエットの成果だけじゃなく初めて友達が出来た達成感も含まれているんだろう。

今の俺ならあれ、いけるんじゃないか？ ——秘技、階段二段飛ばし。

「おい！ その一年生！ 何ぼさつとしてるんだ！ 豚公爵が下りてくる、いや落ちて

くるぞ！ 避けたまえ！」

あん？ あれは誰だ？ 下の階へと続く踊り場で誰かが俺を見上げている。

「——先輩！」

ティナだった。

『シユエ・マリオネット』にて波乱を起こすムツツリエロ本魔王が教科書を大事そうに抱え、上から二段飛ばしで下りてくる、いや飛んでくる俺を見上げていた。

ちよっ——危ない、どいて。

けれど勢いに乗った俺の身体には急ブレーキなんて便利な機能は付いていない。

激突だけは避けようと意識を極限まで集中させ、スロモーションになる世界で俺は確かに声を聞いたんだ。

「昨日のあれ全部見てたんですかッ！ 先輩！ 答えて下さい！」

背後に見える怒りのオーラ。

俺は彼女の豊かなそこに視線が釘付けになりながらも何とか口を開いて声を出す。

「魔法にしては優雅さには欠けたかも」

「やっぱり見てたんですね！ ああもう、私の優雅な学園生活が！ 最悪！」

「ていうかティナ、素が出てるッ」

「あッ——もう！」

身体を捻りティナとの直撃を避けた俺は勢いそのままに半回転し、階下に向かって再びジャンプ。顔を赤くしている割にはそれほど嫌そうに見えなかったのは俺の気のせいじゃないだろう。

「皆の者聞いたか！ 事案だ！ 女の子が豚公爵に喋りかけたぞ！ 事案だああああ！」

うるせえ事案じゃねえよ。俺だってたまには女の子と喋るんだよ。

それよりも早くシャーロットを見つければ！ 俺は大切な従者である彼女に伝えなければいけないことがあるんだ！

「シャーロットおとおおッ」

従者の名前を叫んでいる俺の様子はまた奇異なものとして学園中の皆の目に焼きつくことになるのだろう。

けれどそんなことどうだっていい！ 俺の人生に新たな一ページが刻まれたのだから！ 教育棟を抜け出し、学園中を走り回ってようやく見つけた。

学園で唯一の仕立て屋さんの店先に彼女はいた。恐らく来るべき俺のダイエツト成功日に備えて制服を新調しに来たのだろう。

「ななな、なんですか、スロウ様！ 大声出して！ 恥ずかしいから止めて下さい！」

「とーもーだーちーが出来たんだってー！！！！」

「……？」

シャーロットはきょとんととして、頭の上にクエスチョンマークを浮かべている。

「ともだち！ 友達が出来たんだって！ しかもさっきは女の子から話しかけられた！」

それはもう早口で友達が出来た旨を伝えると、俺の可憐な従者である大国のお姫様は世界の終わりのように驚き、何かに納得したようにポンと手を打ったのである。

「と、友達!? ……スロウ様。熱があるんですね!? ほら医務室に行きましょう！」

「え、別に熱なんてないよ！」

「それにスロウ様が女の子から話しかけられるなんて信じられません！ でも、もしも……し本当なら絶対デニング公爵家のお金目当てです！」

「ちょ、そこまで言うのは酷過ぎでしょ！」

「いいえ、お金目当てです！ 私はスロウ様の従者ですから分かるんです！ 一番の理解者ですから！ ほら行きましょう、医務室にっ！」

「ぶ、ぶひいいいいいい。放してよシャーロットッ！」

その後、暫く。俺はシャーロットと学園内で出会う度におでこに手を当てられ、熱がなにか確認されたのだった。



続きは、2月18日発売のファンタジア文庫で！

©Rhythm Aida, nauribon 2017